

# 金札

世阿弥作

季は	地は	シテ	後	シテ	ワキ	前
雜	山城	天太玉命		老人	勅使	

「風も静に楓の葉の。く。鳴らさぬ枝ぞ長閑けき。

詞

「抑是は桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。さても山城の国愛宕の郡に。平の都を立て置き給ひ。国土安全のみぎんなり。同じく当国伏見の里に。大宮造有るべきとの勅諭を蒙り。唯今伏見に下向仕り候。

サシ

「夫久堅の神代より。天地開けし国の起り。天の瓊矛の直なるや。名も二柱の神こゝに。八洲の国を作り置き。皇代なれや大君の。御影長閑けき時とかや。

歌

「青丹吉。檣の葉守の神心。く。末暗からぬ都路の。直なるべきか菅原や。伏見の里の宮造。大内山の陰高き。雲の上なる玉殿の。月も光りや磨くらん。く。

「あら貴の御造りや。聞くも名高き雲の垣。霞の軒も玉簾。かかる時代に逢ふ事よと。命うれしき長生の。あつぱれ老の思出や。

「不思議やな参詣の人々多き中に。けしたる宜禰御幸の先に進むぞや。そもそも御身は何くより参詣の人ぞ。

シテ詞  
「是は伊勢の国あこねの浦に住む者なるが。当社伏見の大宮造。天も納受し地もうるほふ。王法を尊び來りたり。

ワキ  
「そもそも王法を尊ぶとは。如何なる望みのあるやらん。

シテ  
「そもそもかゝる身の望みとは。そら恐ろしや此年まで。命すなほに愁もなく。上直なれば下までも。豊に治まる此国の。

地  
「千代をこめたる竹の杖。伏見は是か宮所。参りて拝むこそ。朝恩を知れる心なれ。春は花山の木を伐れば。く。袂にかかる白雪。深き井桁を切るなるは。欄井の釣瓶縄。又泰山の山下水。其巖石を切石。

シテ 「船を作する揚柳。

地 「木の間になさん槐の木。

シテ 「それは秋立つ桐の木。

地 「君に齡をゆづり葉や。

シテ 「千年の松は伐るまじ。

シテ詞 「名は春の木の枝ながら。花はなど榦葉。これは神の宿木。恐れあり伐るまじ。

シテ詞 「あら不思議や。天より金札の降り下りて候。すな

はち金色の文字すわれり読み上げ給へ。

ワキ詞

「実にく天より金札の降り下りて候ふぞや。取り上げ読みて見れば何々。そもそも我国は。真如法身の玉垣の。内に住めるや御裳濯川の。流れ絶えせず守らん為めに。伏見に住まんと誓ひをなす。さて此伏見とは。何とか知し召されて候ふぞ。

シテ 「事も愚や伏見の宮居。此御社の事なるべし。

シテ 「あら愚や伏見とは。総じて日本の名なり。伊奘諾

伊奘冊の尊。天の磐座の苔筵に。臥して見出だし

たりし國なれば。伏見とは此秋津洲の名なるべし。

地「人知らぬ事なり。此國も伏見里の名も。伏し見る夢とも現とも。分かぬ光りの内よりも。金の札をおつ取つて。かき消すやうに失せけるが。しばし虚空に声ありて。

シテ「是は伊勢大神宮の御つかはしめ。天津太玉の神なり。猶しも我を拝まんと思はゞ。重ねて宮居を作

り崇むべしと。

地「迦陵頻伽の声ばかり。虚空に残り雲と為り。雨と為るや雷の。光りの内に入りにけり。く。(中入)

地「樂に引かれて古鳥蘇の。舞の袖こそゆるぐなれ。

後ジテ「守るべし。我國なれば皇の。万代いつと限らまし。

地「限らじな限らじな。栄ゆく御代を守りのしるし。

シテ「たゞ重くせよ神と君。

地「重くすべしや重くすべしや。扉も金の御札の神体。

光りもあらたに見え給ふ。

地 「四海を治めし御姿。く。

シテ 「あらたに見よや君守る。

地 「八百万代のしるしなれや。

シテ 「悪魔降伏の真如の槐弓。

地 「さて又次にはさばへなす。

シテ 「荒ぶる神も祓へのひもろぎ。

地 「其神託は数々に。左も右も神力の。悪魔を射拵ひ

シテ 「清めを為すも。金胎両部の形なり。

「とても治まる國なれば。

地 「とても治まる國なれば。中々なれや君は船。臣

は瑞穂の。國も豊に治まる代なれば。東夷西戎。

南蛮北狄の恐れなれば。弓をはづし剣を收め。

君もすなほに民を守りの。御札は宮に納まり給へ

ば。影さしおろす玉簾。影さしおろす玉簾の。

ゆるがぬ御代とぞなりにける。

底本 .. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第七輯』 大和田建樹 著